無断転載禁止

昭和三十年六月十一日

座談会

「柳谷素霊先生渡佛を前にして」

出席者　柳谷素霊　石野信安　井上恵理　西沢道允　本間祥白　戸部宗七郎　医博

司会

左より本間、西沢、井上、石野、柳谷の諸氏

戸部　本日は柳谷先生の渡仏を前にして御出席の諸先生から医道の日本誌読者の代表になつて頂き、柳谷先生に対して色々希望をのべて頂きたいと思いまして此の座談会を催した次第であります。

此の度柳谷先生がジュポン博士に招かれてフランスに行かれる事になりましたが、これは我々の今日までおこなつて参りました針術が外国にまで高く評価されている証拠でありまして御同慶の至りであると同時に責任の重大さを感ずるのであります。

では先づ柳谷先生から一言御願いします。

柳谷　昨年シュミット博士及びジュポン博士が来朝せられ、日本針灸術を学んで帰られたが此れは其のホンの一部分でありまして、ジュポン氏が帰国の時に来年もう一度来たい、若し来られない時は私を御呼びしたいが来られるか、との事でしたが此れは一つの外交的辞礼と受取つておつたのでしたが、昨年十月を第一便としてその後熱心なる招聘の通信の結果愈々行く事になりましたので、其の後外国行きの面倒な手続を経て様々出かける事になつたのであります。

井上　先生のこの度のフランス行は、私達門下生、一同の大きな喜びであると同時に、日本の針灸界としても非常に有意義な事と思います。近来、何んでもかんでも、外国のものばかり崇拝の結果あちらのものでなければの時に日本の鍼灸術を教えにゆくと云う事は国家的にみても有意義な事だと思います。

私が先生にお願いしたい事は先生が向うに行つて大いに普及して貰いたい事は針灸の実技の面で特に微針（細針）の技術の指導と針灸術は理論より術が先行しなければいけないということ、これは私の昔からの持論でかつては皆さんと一緒に古典復興の運動もし、又現在も針灸術の本質を実践の上に明示する事を目的として居ります、欧洲に於いてもこう言うことが要求されているのではないでしようか、

石野　今の井上先生の御意見には全く同感です、それでお願いしたい事は日本の研究方法を向うへ伝えてやると云う事が非常に大事ぢやないかと思んです。日本の医学者が向うのものだと取入れるが、こつちのものだと、取入れないと云う、変な考え方があるので、それで、向うのものを正しいものにしてきて頂かなければいけない。術を先づ第一だと云う事は同感ですが、研究態度が、どう云うものであるか、日本では古典主義と云つたものを柳谷先生を中心に一つの組織をもつて研究しているが、このやり方を向うがとつているかどうか、只、個人的に物珍らしさの故にやつているだけのものか、共同研究をやつているのかを知り度いところで、若しやつていなければ、日本のこの方向に導いて貰い度い、その術はほんとの只、木に竹をついだような、所謂科学的だと云う幼稚な方法から脱却してほんとの針灸を向うへ伝えて貰い度いと思います。

本間　私が第一に先生にお願いしたい事はですね針灸の発展の為に、日本は、どれだけの役割をしているのかを、向うに伝えて頂く事も大切と思います。其の理由は欧洲側から見れば日本は、中国に於いて大成された針灸術の技術と学問の糟粕をなめているに過ぎないとして、日本伝来以後の発展的仕事に対してシュミット氏ジュポン氏等少数の方以外は目を向けていない傾向があるのです、日本に伝つてから幾百年から模倣時代の後には独自な流派が出て、技術上に著しい進歩を招来し、又近世に於いては自然科学的な研究が行われたり、次に又現代に於いては古典主義と、之に反対する実証主義が現れて学術の検討が行

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。
営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます

無断転載禁止

われている間に長足の進歩を来たしていると見なければならないが此の点を先生自らの**手**と其れから**口**を以つて強調して頂きたいものです。

柳谷　それはネよくわかります、本間先生の言われる通り外国では日本をそう思つているかも知れない。又井上先生の言われた行が先で学が後なんだ東洋の学問は皆そうなんだ。

井上　先程先生の言われた、内経の「微針をもつて最となす」と云う考え方が、日本で発達して今日に至つているのですが、今、欧洲の針をみるとあのように実に太いですね、あれはもう微針以前の砭石の治療と云う事にならないでしようか、微鍼による治療を大いに普及する必要もあるし今後我々と同じ様な微針を使つてやると云う事も考えると思います、然し、欧洲の太い鍼の治療による対象体質及び病証も見て来て戴き度いです。つまりフランス人や又ドイツ人の体質、病型を東洋医学的に見て来ていただきたいのです。

石野　又針を刺した場合の反応如何もですネ。

柳谷　どう言う証が多いかと言う事を見て来るんだろう。

井上　そうそう。

西沢　証の状態がどう違うかですネ。

井上　ドイツやフランスの人はあの太い針を刺して案外弊害がなくよく効くとすると相当実証の人が多いと思うのだがネ。

西沢　私の御願いは、東洋医学の研究についてはフランスは相当古い歴史を持つている筈なのだが、東洋医学の特徴である陰陽虚実と言うものをどう言う観方をしているかを見、若し間違つていたら是正して来て頂きたいものです。

戸部　日本人の考える把握内容とは大部違つているものだとは思えるんですネ。

本間　陰陽虚実については日本人自身すらまとまつていない部面があるんですからネ、その実は

石野　然しネ陰陽虚実がなくてどうして治療が出来るかネ。

西沢　出来ないですョ。

石野　出来ないものをやつているとすると、おかしいんだョ

井上　つまり傷寒論の取り方と素問の取り方に相違がある、そこを今後我々は統一しなければならない仕事があるんですネ。

西沢　大いに賛成です。

井上　今日私の所へパリ大学出身の中国人の博士が来ましたが、此の方も針灸術に関する理論方面はかなり深い造詣を持つているのには驚きましたが、此れを実際にどうあてはめるかと言う事が解らないのです、例えば、三部九候の脉論に関してはよく理論的に知つているのですが其の実際の取り方はチットも解つていないのです。

柳谷　ジュポン博士もそうでしたネ

井上　其の知識を臨床的に如何に応用するかと言うことがわからないのですネ。

石野　本当にネ　此れは師匠が居ない悲しさですョ、針、漢方、皆師匠につかなくては、駄目な領域があるんだネ。

柳谷　私はヨーロッパへ行つたら大いに此の点を力説する積りだ、先づ「こうやるんだ。出来るか。」とやつて出来なければ何偏でもやらせる。習うより慣れろ、そうしている内に自得する。其の次に理窟を教えましよう。

本間　理論の先に実践が大切なのだからネ。

柳谷　此れ迄の先程石野先生からも申されましたが、研究方向をよく見て来て頂きたいのです。

井上　文化の発祥地たる小アジヤに発生した針灸術が印度に渡り、更にチベット、蒙古を経て中国黄河流域に来て古代支那文化に合流し大成されたものであるが、日本に渡つて一層洗練された形になつていたが、今迄は凡て黄色人種の知慧によつて黄色人種の肉体にのみ実践されて来たのです。

今度は針灸術は白色人種の知慧と肉体を食う事になつた訳ですネ、すごい飛躍をするのではないかと思います、よい意味で、所で欧洲の針灸家は皆科学的教養を身につけた立派な医者のみである。日本の針灸師と大変趣きが違つていますネ。其処でです、一本のバトンを科学者に渡した以後の我々の仕事は何処に求むべきか、と言う点で再考しなければならないと思うんです。勿論只今柳谷先生が言われた学問以前のもの、学問の素材となるものを我々は持つて居り実践しているのですが、然し只それだけにとどまつていてよいのではない、科学者と協力して更に新しい面の仕事も出来てくると思います。

柳谷　よく分りました、実践と理論は交々発達するものですから、此れでよいと止つていたら次の段階の実践任務は果せない事になりますからネ。

西沢　フランスでは陰陽説に対して未だ形式に捉われ過ぎている様に思われますネ。例えば金の針は補で銀の針は瀉である等と本気で言つているが、我々の臨床上から見ておかしいと思われるんですがネ。

柳谷　私も思うんですが、ですがネ彼等は今後の研究でどんな実証を行うか分らないから、そうした断定する事が却つて科学的態度でないかどうか御反省願いたいもんですネ、ハッハッハッ此れは痛いですネハッハッハッ

戸部　では此の辺で終りたいと思います、有難う御座いました。先生御元気で鹿島立ちして下さい。あちらのニュースを鶴首しております。

このコンテンツは株式会社医道の日本社、著者が有しており、日本の著作権法および著作権に関する国際法によって保護されています。
営利・非営利にかかわらず、複製、複写、コピー、販売、その他の再利用を固く禁じます